

【令和4年度 自己評価結果公表シート】

学校法人直江津龍谷学園 真行寺幼稚園

1. 本園の教育目標

(教育目標)

「浄土真宗の精神」にのっとり、宗教的情操の豊かな人材を教化育成することを目標とする。

(教育方針)

- 1) 「仏さまをおがむ子」 たくましい豊かな心をそなえた子
- 2) 「ありがとうの言える子」 感謝と協調のできる子
- 3) 「よく聞く子」 聞く態度を身につけ、探求と創造と自立を目指す子
- 4) 「なかよくする子」 助け合うことに喜びを感じ、仲間作りにはげむ子

2. 本年度、重点的に取り組む目標・計画

(本年度の総合教育目標)

主体性を育む (5カ年計画 1年目)

(本年度の重点目標)

「なかよくする子」 助け合うことに喜びを感じ、仲間作りにはげむ子

(本年度の重点計画)

昨年度から引き続き、「なかよくする子」を重点教育目標とした。今年度は、お友達やクラスメイトとなかよくするだけでなく、自分自身ともなかよくできる子に育てたいと考える。自分自身となかよくするということは、自分の気持ちをコントロールできることであると考えている。気持ちのコントロールの成長ということについては、成功から得られるものより、失敗から得られるものの方がより大きいと感じる。

子どもが自分の気持ちをコントロールする力を育むため、これまで以上に＜幼稚園を失敗してもいい、間違ってもいい＞居場所にすることから始める。

「失敗するからやらない」「間違ったら恥ずかしいからやらない」「どうせ負けるからやらない」という子が多くなってきた。失敗してもいい、何にでもチャレンジし、くじけずに何度もアタックできる意欲ある子に育てたいと願う。

そのためには、安心して【失敗】体験ができ、その【失敗】から成長(気持ちのコントロール)や成功体験につなげ、意欲や自己肯定感が生まれる幼稚園でなければならないと考え、取り組む。

1) 「主体性」を育てる (5カ年計画1年目)

「運動会」「作品展」「お遊戯会」「音楽発表会」が、当園における大きな行事である。どの行事も、協同性や協調性を高め育てることに重きをおいてきた。

しかし、2017年に改訂された『幼稚園教育要領』(第1章)総則(第1)幼稚園教育の基本(1項)には、「幼児は安定した情緒の下で自己を十分に発揮することにより発達に必要な体験を得ていくものであることを考慮して、幼児の主体的な活動を促し、幼児期にふさわしい生活が展開されるようにすること。」

また、(第2)幼稚園教育において育みたい資質・能力及び「幼児期の終わりまでに育ててほし

い姿」(2) 自立心には、「身近な環境に主体的に関わり様々な活動を楽しむ中で、しなければならないことを自覚し、自分の力で行うために考えたり、工夫したりしながら、諦めずにやり遂げることで達成感を味わい、自信をもって行動するようになる。」とあるように、子どもの主体性を育てることが求められている。

昨年、自由遊び時間に年長児から「何をして遊んでいいか分からない」との言葉をもらう。長年、幼稚園に携わっているが、はじめての言葉に戸惑った。子どもは勝手に遊ぶものだと思い込んでいたが、保護者や保育者が与えすぎていて、自分で考えて遊んだり、何かをやりたいという意欲が少なくなってきたのかもしれない。

「主体的」とは、何かを一方的にやらされたり教えられたりして技術を獲得するのではなく、内的な動機が行動の源となり、そのことが結果的に技術の獲得につながる。子どもの意志をもって行動する力を育てる保育教育への転換が必要となっている。

教職員自身の学び、園児への教育、保護者への周知などを考えると1年や2年で変わっていくことは難しく、今年度は5年計画の元年として取り組む。

2) 「安全」の再確認

安全の確認を改めて行う。安全については、点検や改善を行ってはいるものの、軽度な怪我や事故がなくなるのが現状である。

「ヒヤリハット報告書」や「怪我報告書」を細かく記入し、その結果を分析し、安全性を高めていく必要がある。

火事、地震、豪雨、大雪などの災害対策、不審者などの犯罪対策、通園退園時やお散歩の事故対策についても再度見直し、現状に即した対策を実行する。

3) 認定こども園への移行

令和4年4月から、認定こども園(幼稚園型)に移行するにあたり、園児や保護者にとって不安や不利益がないように、新潟県や上越市の関係部署と連携して情報提供などを確実にを行う。

3. 評価項目の達成及び取り組み状況

評価項目	結果	理由
重点目標 「なかよくする子」 自分の気持ちをコントロール 失敗を成長につなげる	A	各学年、クラス、早朝・延長保育それぞれに、担任や補助教諭、担当教諭が様々に配慮や工夫をして、「失敗してもいい、間違ってもいい」環境を整えた。 教員自らが間違ったり、失敗したことを認め、子どもたちに公表するとともに、その後の取り組みを見てもらう教員が多くあった。 また、失敗をした時に他の子どもの前では言わないことや、失敗と感じさせない声かけなど、雰囲気作りを気をつけている教員も多くあった。 体操指導で出来なかったことを、自由遊び時間等に取り入れ、練習を重ねることによって出来るようになり、それを認め自信につながったケースがあった。

		<p>おゆうぎ会の練習の時に、違った振り付けで踊ってしまう子があったが、その振り付けの方が皆がよいというので、その振り付けに変更したというケースもあった。</p> <p>年少児、未満児では、食事、排泄、衣服の着脱など、生活全般を身につけることが多く、自らのペースで進め、出来たことは認める中で、一つひとつ出来るようになり、チャレンジする気持ちを育むことができています。</p> <p>集団生活ならではの失敗を大切に、成長につなげることが出来ていると感じる。</p>
<p>総合目標 「主体性」を育てる <5カ年計画 1年目></p>	<p>A</p>	<p>昨年度の自己評価時には、子どもが主体の行事にすることを今年度の課題としていた。行事だけ子どもの主体性を取り入れることは可能である。しかし、日頃からの保育教育の中でいかに主体性を育み、その主体性を行事に反映させていくことが筋道であると考え、まずは日常の保育教育の中で主体性を育むことを主とした。</p> <p>【年長児】</p> <p>日頃から、より子どもたちの行動を観察し、会話を聴くなどして、興味や関心を探ることからはじめた。興味や関心のあることを広げていける工夫を凝らした。自分で考え、選択し、行動できるような配慮を行う。</p> <p>はじめは戸惑う子も多かったが、徐々に参画や発言が多くなってきた。あえて担任からは何も言わずに、子どもたちに任せる時間を設けたり、遊具や玩具が無い中で工夫して遊ぶ時間を設けたりした。</p> <p>運動会では、リレーの走順を子どもたちに決めてもらった。リレーの練習を重ねるたびに、走順を変えるなどの工夫が見られた。</p> <p>作品展では、個人制作としてドラえもんのみみつ道具を作った。自分でオリジナルのみみつ道具を考え、設計図を書き、廃材で試作品を作った。試作品を持ち帰り、保護者と相談して材料を家庭から持ってきてもらい、園で制作して完成させた。時間も労力もかかったが、子どもの主体性を十二分に発揮することのできた活動であった。</p> <p>【年中児】</p> <p>日々の活動の中で、これまで1から10まで教えていたものを減らし、なるべく自分で考えて10にたどり着けるような指導を取り入れた。言葉がけなども工夫し、自分のやり方でゴールを目指すようにした。</p> <p>毎日の遊びの中で、友達の真似をしたり、相談したり、集団生活ならではの刺激を大切に。しっかりと時間をとり、やりたいことを納得できるまで遊び込めるようにした。</p> <p>子どもたちの声を取り入れるため、話しやすい、発言しやすい雰囲気作りにも苦心した。</p> <p>集団行動が苦手な子には、興味のある方法で促してみた</p>

り、好きなこと得意なことを活かせるように取り組んだ。おゆうぎ会のオペレッタでは、忍者とかみなり団の対決の場面で、火・水・風・雷、それぞれの攻撃を受けたときに、一人ひとりオリジナルのリアクションを取り入れた。同じ雷の攻撃を受けても、電気で痺れている子、大きな音で耳を塞ぐ子など工夫して表現していた。

【年少児】

制作活動の説明などでは、一方的に説明をすることをせず、考えさせ、子どもの声を拾い、取り入れていくようにした。

怪我などの心配のある活動の前には、わざと間違った行動見本をして、子どもにどこが間違っていたのか考え発言してもらうことを取り入れているクラスもあった。

考えを言葉に出して伝えるということが重要になるので、まずは発言できるように、発言しやすい環境を整え、考え発言することを待つ時間を設け、発言の機会を増やすなどした。

【未満児】

主体性を育む土台作りの時期と考え、日々の生活の一つひとつを大切に、共に体験経験サポートし、認め喜び合える環境を整えた。

あたたかく、安心して楽しく生活でき、自分の力と個性を発揮できるよう工夫をした。

子どもの「もう一回やりたい」をどう育てるかを大切にしました。

小さな事でも選択したりする機会を増やした。おゆうぎ会では自分の衣装の色を自分で決めたことにより、衣装に愛着を持ち、張り切っておゆうぎに取り組むことができたクラスもあった。

【早朝・延長保育】

時間に追われることがなく、少人数で家庭的な雰囲気の中での保育ということもあり、より子どもたちの声を取り入れた主体的な活動ができた。

制作活動などもじっくりと自分の思うように取り組むことができた。

また、年長児や年中児は、やりたいことを発言したり、友達や担当教員や相談する姿も多く見ることができた。

部屋の片付けなども、子どもたちが率先して工夫しながらするようになったり、自発的に挨拶が出来るようになったりと随所に主体性の育ちを見ることができた。

「安全」の再確認

A

園内研修や園内の点検などを通して、安全の確認を改めて行った。必要な修繕や改善を行い、軽度な怪我や事故を前年度までに比べかなり減らすことが出来た。

「ヒヤリハット報告書」ならびに、「怪我・事故報告書」を細かく記入し、終礼やミーティングなどで内容を共有

		<p>や分析することにより、より安全への意識を高めることが出来た。</p> <p>静岡県でのバス置き去りによる死亡事故、また全国各地で起こっている不適切な保育の事例を、園内研修にて取り上げ、マニュアルの見直しなどを行うことが出来た。</p>
認定こども園への移行	A	<p>令和4年4月に、認定こども園（幼稚園型）に移行完了した。移行に関わる事務手続きや保護者への周知などは、順調に行うことが出来た。</p> <p>移行後は、主な事務窓口が新潟県から上越市保育課に移ったこともあり、提出書類や事務手続きが心配されたが、園児や保護者に不安や不利益をあたえることなく進めることが出来た。</p> <p>認定こども園に移行して、年1回だった内科検診や歯科検診が年2回になり、毎日の感染症の内容や学級数、人数報告など、保健業務や事務などが多くなり、教職員の業務負担が増えた。園児の健康面にとっては有益であった。</p>

4. 学校評価の具体的な目標や総合的な評価結果

評価	理由
A	取り組むべき課題について、全教職員が共通に理解し、実践することができた。

5. 今後取り組むべき課題

課題	具体的な取り組み方法
主体性を育む ＜5カ年計画 2年目＞	<p>今年度は「主体性を育てる」として取り組んできた。しかし、主体性は「育てる」ものではなく、「育む」ものであると実感する。「育てる」は、教員が中心で子どもを育てるものであり、「育む」は子どもが中心で教員がサポートする感覚であるように考える。</p> <p>今年度の経験と反省を活かし、また教職員間での育み方や子どもの成功や成長の共有を行い、より「主体性を育む」環境を整えたい。行事の内容なども見直し、より「主体性を育む」ことができる行事になるようにする。</p> <p>また、「失敗してもいい、間違ってもいい」ということと、「主体性を育む」ことは密接に関係しており、引き続き重点目標とする。</p>

健康について	コロナ禍にあり、ここ数年はコロナ対策を重点的に行っていたため、園児の健康面について少しおろそかになっていた部分もあった。認定こども園になり、保健業務が多く加わったこともあるが、今一度、保健衛生健康について見直し、取り組むべき課題であるとする。
保育環境の設定について	子どもが安全かつやりたいことが思いっきりできるように保育環境を整えることが必要。 時代や子どもたちの変化に対応した環境にするため、本館の教室などの改修工事を今後2年の間に行う。また、動線に合わせた遊具や保育者の配置と連携が重要とする。今あるものを活用しながら、工夫して環境設定を行いたい。

6. 学校評議員の評価

令和5年2月18日に学校関係者評価委員会が開催されました。(委員16名中14名出席)
評価委員の皆様からは、適切に運営されていると評価をいただきました。

以下、評価委員さんからいただいたご意見ご要望などです。

- ・「主体性を育てる」という目標におかたて、教職員が真摯に子どもたちと向き合って保育教育されていることがよく分かる。
- ・「おゆうぎ会の練習の時に、違った振り付けて踊ってしまう子があったが、その振り付けの方が皆がよいというので、その振り付けに変更したというケースがあった」という事例には、涙が出るほど感動した。
- ・自分自身の子育てを今振り返ると、反省することばかりである。当園の取り組みなどを参考に、今度は孫育てに活かしたい。
- ・バス置き去り死亡事故や不適切な保育など、保育教育に関する暗いニュースが多く、心配することが多くあった。しかし、当園の子どもたちの安全に関しての取り組み方などを聞き、安心できた。
- ・少子化で園児数を維持するためには、特色ある教育を行うことで、より多くの保護者や子どもたちに、入園したいと思われるような運営が必要だと思われる。
- ・来年度は創立70周年にあたる年であるので、記念事業や記念行事を行って欲しい。

7. 財務状況

公認会計士監査により、適正に運営されていると認められている。

以上